高森町立　高森中学校

つなごう！ 私たちの「憲法」

「いじめのない学校」、幸せな学校生活を目指して

やまびこだより No.133（2014年度）より

小原ヶ丘憲法（こばらがおか）

高森中学校生徒会
平成20年度制定

前文
この憲法は、皆さんの悲しみの涙を喜びの涙に変えるために、また、高森中学校に笑顔が広がるために制定されたものである。
この憲法を守り、一人で苦しんでいる人、悩みを抱えている人が登校すれば癒される学校を作らねばならない。

序文
この憲法に反した場合は、相手に謝り 握手を交わそう。

第一条
高森中生ならば、この憲法を守らなければならない。

第二条
「うざい」「キモい」「死ね」などの悪口は言ってはならない。

第三条
無視は無言の暴力。いかなる暴力も振るってはならない。

第四条
見ているあなたも加害者である。いじめられている人に手をさしのべよう。

高森町立高森中学校には「小原ヶ丘憲法」という、全校で大切にしている約束があります。これは6年前に、当時の生徒会役員が中心になって制定したもので、「いじめを防止し、なくす」ことをめざしています。
中学生にとって、とても身近な問題である「いじめ」をなくそうと真剣に考え、その思いを大切に守っていこうという精神が、「憲法」には生きています。

高森中学校「小原ヶ丘憲法」の条文と2014年度生徒会の皆さん

「憲法」に込めた願い

「小原ヶ丘憲法」を作った当時、高森中学校では目立った深刻ないじめは起きていませんでした。けれども、いじめを苦にして命を絶つ中学生のニュースが時折流れ、他人事ではないのではないかという思いもありました。こんな悲しいことが起きないように、自分たちがいじめに加わることがないように…そのために作られたのが「小原ヶ丘憲法」です。

当時は生徒たちの間にも「いじめられる方にも問題がある」という声があったそうです。また、自分では積極的に手を出さないけれど、実際に起きているいじめにさえ気づかないだけかもしれない。それでいいのでしょうか。表に出ていないけれど問題の根は深いのかもしれないという思いから、本気でいじめをなくすために、一番大切なことは何かを盛り込んだ条文を作りました。

「憲法」を大切に守る

高森中学校では、この「小原ヶ丘憲法」を今でも大切に守っています。全校生徒が毎日通る大階段や教室に条文が掲げてあります。ただの標語として終わらせるのではなく、いつも意識していられるように、人権集会で条文を学びます。毎年行われる「憲法の学び」によって、小原ヶ丘憲法の精神は高森中学校の生徒たちに代々引き継がれていきました。

昨年度から、生徒会には「いじめ対策委員会」がおかれ、いじめに関する調査を定期的に行い、全校でいじめについて考える時間を持っています。「憲法」はいじめを糾弾するのではなく、常に自分の振る舞いを振り返る基準、心のよりどころとなっているということです。

「憲法」が町の条例に

「憲法」を大切に守っていく取り組みは、町の大人たちを動かしました。中学生が制定した「小原ヶ丘憲法」の精神を町全体で共有し、いじめのない町にしようと、2013年「高森町いじめ防止条例」が制定されました。

生徒会いじめ対策委員会の取り組みは、先生方や教育委員会とも共有されています。それにより、いじめを防ごうという意識が中学校だけでなく町内全体で高まっています。

「小原ヶ丘憲法」の掲げた願いは、こうしてつながれているのです。

2007年
［社会的背景］
「うざい」「キモい」などの言葉が流行
全国でいじめ問題が顕在化
学校の人権教育

2008年
生徒会総選挙
「いじめのない学校」を公約に
会長、副会長が立候補

僕らの学校は大丈夫だろうか？他人事ではない！

新生徒会によるいじめに関する
アンケート調査

「理由があれば許される いじめもある」という意見が……

生徒会で話し合い

いじめを正当化する人の意識を変えるにはどうすればいいかな？

「憲法」にしたらどうだろう？

学年委員長を中心にアイディアを出し合う

生徒会顧問の先生が助言
この機会に、生徒会でなにか新しいことを考えてみたら？

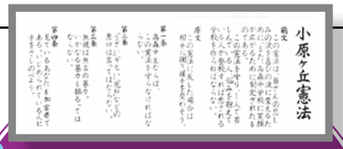
2013年
いじめ対策本部から いじめ対策委員会へ

2008年～
生徒会が代々引き継ぐ憲法を軸にした取り組み

みんなが幸せな学校生活を送るために

生徒会にいじめ対策本部を設置
いじめ実態調査アンケート
人権集会の開催
アンケートの報告
条文の学び

毎月、クラスごとに憲法を確認

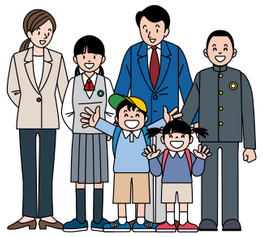


2008年度
小原ヶ丘憲法 制定

生徒総会で全校生徒の承認を得る

憲法の条文を考える
一番大切なことを
新入生にもわかりやすく
顧問の先生とも検討を重ねる

高森町子どもいじめ防止条例
町が条例を制定 2013年度
「小原ヶ丘憲法」の精神は地域の人にも



2011年
［社会的背景］
滋賀県大津市の中学生がいじめを苦に自殺
教育現場の対応が課題に

高森中学校 いじめ対策委員会によるアンケートより
（2014年7月2日実施）

アンケートは年に数回行い、いじめの有無やいじめのない明るい学校にするためにはどうすればいいかなど調査をしています。
アンケートの結果は、人権集会で全校の皆さんに報告しています。

「いじめについてのアンケート」

いじめのない学校を目指すために

次の質問にあてはまる番号に○を付けてください。

問1. 5月のアンケートでいじめを受けていると答えた人が2％いました。5月のアンケートでいじめが「ある」と答えた人に質問です。そのいじめは、今も続いていますか?
1.続いている　2. 続いていない

問2. あなたは、5 月のアンケート以降に新たないじめをみたことがありますか?　(加害・被害をふくむ)
1.ある　2.ない

問3. 問1 ・問2 で続いている・あると答えた人に質問です。
そのいじめは、どういった内容ですか?
1. ひやかされる、からかわれる
2. 無視・仲間はずれ
3. 暴力をふるわれる
4. 金品をたかられる
5. 悪口などをいわれる
6. 持ち物を隠される、壊される
7. 悪口等をネットに書き込まれる
8. いやなこと、恥ずかしいこと、危険なことをさせられる

問4. いじめであるとは感じていないが、しつこいいたずらなどで、不快に思うことはありますか?
1.ある　2.ない

問5. いじめ対策委員会に要望があれば自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。
アンケートの内容は、今後の活動及び対策に役立てていきます。

●「小原ヶ丘憲法」制定当時の生徒会役員 熊谷翔さんより

いじめは、自分たちの問題。だから自分たちで考えて解決していかなくてはなりません。自分たちだけではできないことも、発信すれば大きな動きになります。大人の協力を得ながら、社会を変えていくことは可能だと思います。

長野日本大学学園 長野小学校

シカの食害問題から学ぶ

ふるさとの自然のこと

福祉教育実践ガイド 2013年度版より

ニッコウキスゲのお花畑をよみがえらせよう(霧ヶ峰高原で)

シカを取り巻く環境を知って、いろいろな意見が次々と……

豊かなふるさとの自然について、環境問題について、低学年の子どもたちと考えてみたい…。先生の願いからはじまった「シカの授業」。シカの食害を切り口にしたのは、先生自身のテーマでもあったから。子どもたちは柔軟な発想と体験を通して、この難しい課題に楽しく取り組んでいます。

新聞記事やニュース映像でシカの食害の実態を知る

2011年度に開校したばかりの長野日本大学学園長野小学校では、第1期生が1年生の時から、シカの食害を切り口に環境問題を学んでいます。

市街地の学校で、なぜ「シカの食害」を？ 担当の清水先生は、以前は放送局の記者としてシカの問題を追いかけていました。自然環境をめぐるいろいろな課題が、シカから見えてくることを実感しました。その広がりを、子どもたちとともに味わいたいという思いで、この授業を始めました。

授業では、子ども用に書き直した新聞記事や、ニュース映像などを通して、市街地では直接見えない食害の様子に触れます。

シカに食べ尽くされてしまった森の様子、そのために起きた土砂崩れや、その土砂に埋まってしまった水源地を見て、子どもたちは驚きました。「シカも悪くないけど、森がかわいそう…」「森が、シカに殺されちゃうよ」「山とぼくらが住んでいるところは全然違うけど、シカが木を食べてしまうといろんな危険なことが、ぼくらの周りでも起きちゃうかもしれないんだ!」。

「なぜこんなにシカが増えたの?」天敵のニホンオオカミがいなくなってしまったこと、ハンターが高齢化していること、森に手が入らなくなったこと、環境破壊など、人間のくらしが変わってきたことが、その背景にあると知りました。人間にも責任がある、ということが、子どもたちには衝撃です。

解決のためにできることは？自由な発想が気づきを深める

シカの駆除という難しい問題についても話し合いました。本物の罠にも触れました。「人間のせいなのに、かわいそう」「せめて子ジカは撃たないであげて」「落とし穴で捕まえて、動物園に連れて行こうよ」など、様々な意見が出てきます。話し合いはいつも白熱します。

シカの数を増やさないこと、シカに荒らされた森を復活させることの両方が必要なんだ、と気づいた子どもたち。話し合いの中で、シカに食い荒らされた霧ヶ峰高原（諏訪市）のニッコウキスゲのお花畑をよみがえらせたい、という意見が出てきました。地元の小和田牧野（ぼくや）農業協同組合の皆さんに種を分けてもらい、学校で育てて、みんなで霧ヶ峰に植えました。地元の皆さんと一緒に勉強会もしました。

長野県の自然の豊かさ、様々な生きものの存在、自然と人のくらしとのつながりなど、低学年の子どもたちはたくさんのことを学びました。

どんなに複雑な課題でも、解決のためにできることは必ずある。まずできることから始めるということも、この授業を通して先生が子どもたちに学んでほしかったことです。シカの食害は、中山間地の過疎・高齢化や、森林の荒廃、土砂災害や水資源の問題、地球温暖化とも深くつながっています。シカをきっかけに気づいた環境問題へのまなざしをさらに深め、学び続けていきたいと、先生は考えています。

学校で種から育てた苗を、みんなで霧ヶ峰高原に植えました。

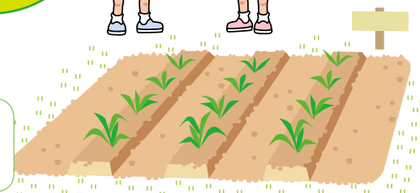
シカの食害が深刻化している霧ヶ峰高原へ

ニッコウキスゲの苗を植えよう！

ニッコウキスゲのお花畑をよみがえらせたい

小和田牧野農業協同組合の皆さんと

ニッコウキスゲの種をもらって学校で苗を育てました。



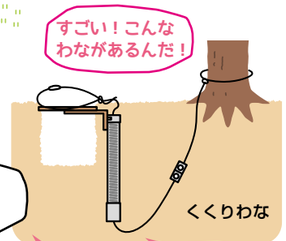
シカに荒らされた森を復活させよう

銃以外で捕獲する方法は？

捕獲して動物園へ

落とし穴を作る

わなを設置する



被害を減らそうと取り組む人たちを紹介。

シカをこれ以上、増やさないために

シカから自然を守るためには？

電気柵を設置する

嫌いな物を置く

駆除する

シカは悪くない、かわいそう

どうしてシカによる被害が増えたんだろう？

猟友会員の減少（高齢化）

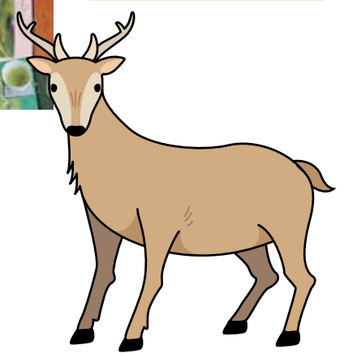
中山間地の過疎化

地球温暖化？

ニュース番組

新聞

生活科の時間に、シカによる農林業被害について、新聞記事やテレビの特集番組を教材に授業を開始。



●長野小学校担任　清水きく江先生より

シカの授業は、本当は高学年で取り組む予定でした。しかし、一度やってみると、１年生でも環境問題や山間地が抱える問題に対して真剣に向き合い、熱心に話し合っていて、その姿には正直驚きました。子どもなりの柔軟なアイディアから、課題解決に向けた対策が生まれるかもしれません。

未来を担う子どもたちが、故郷＝信州の自然をどう守っていったらよいのか、シカの食害をきっかけに自ら考え、実践していかれるまでに成長してくれたらと願っています。

松本市立　奈川中学校

STOP! 奈川の人口減!!

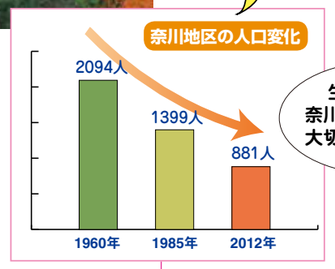
私たちの地域　いま・未来

やまびこだより No.131（2013年度）より

どうしてこんなに人が減ったのだろう？

ショック！このままではムラが消える!?

社会科の授業で日本と世界の人口を学ぶうち、自分たちの地域の人口変化を知ってびっくり！



地域の方々への聞き取り調査をしました

奈川を離れた人の話　まちへ出た理由

生活が不便：欲しいものがすぐ手に入らない。

仕事がない：お店が少ない。

高校がない：生活費が稼げない。家族が一緒に暮らせない。

住み続けている人の話　奈川を離れないのはなぜ？

先祖代々の土地を守っていくから。

奈川はいいところだから。

移転するお金がない。

引っ越しが面倒だ。

生まれ育ったここが好きだから。

心に残ったお年寄りの言葉

生まれ育った奈川を誇りに思い、大切にしてほしい。

一人でも多く奈川を守っておくれ。

地域社会の一員として奈川の将来像を考える

コンビニもない。お店には欲しいものがない。学校の生徒も少なくて、高齢の人がとても多い。街までは、カーブの多い道を車で1時間かけて下りていかなくてはならない…。松本市奈川地区はそんな地域です。子どもたちは、中学校を卒業したら高校に通うために地域を出て暮らすことがほぼ確実です。

「何もないから、奈川は好きじゃない」そう思っている生徒たちに、故郷への誇りをもってほしい。2学年担任で社会科を教えている若林史也先生は、世界と日本の人口についての授業に、そんな思いをこめました。人口という切り口で日本全体、世界と比較すると、奈川がどんな地域なのかを感じられるのではないか。そこから地域を見る視点を育てられないか。そんな願いで「STOP! 奈川の人口減!!」の授業が始まりました。

奈川の人口構成はどう動いてきて、この先はどんなふうに変わっていくのか、自分たちで予測データを作りながら考えます。出ていく人、残っている人のそれぞれに、数字だけではわからない地域と未来への思いを聞く訪問調査を行いました。

コンビニがなくてもいいなんて!?

訪問調査では、中学生は温かく迎えられました。「この奈川に帰ってきてくれよ」と言ってくださった人もいます。都会の人を呼び込もうと取り組んでいる人も、伝統の祭りを絶やさないように頑張っている人もいました。また、中学生にとっては大問題の「コンビニがない」ということも、村の人には大きな問題でないこと、むしろ支えあって暮らしている関係こそが大きな財産だという話も聞かせてくれました。一人ひとりが、地域に対して様々な思いを持っていることを知りました。

豊かな自然と伝統があり、支え合う優しい人々がいる地域。そんな地域の良いところを失いたくない…そのために、地域の人々を支えなくてはいけないし、支えてくれる人がもっとほしいと痛感しました。

答えは出ない…でも考えた経験は生きる

人口減少、過疎化は経済・産業構造や行政の仕組みなどの様々な要因が関係する、難しい問題です。すぐに答えが出せるものではありません。けれども、彼らが将来自分の生き方を形にしていくとき、ふるさとの存続を真剣に考えた学びが生かされることを先生方は願っています。

そして、「みんなの帰りを奈川で待っているよ」「みんなが地域の宝物なんだ」という地域の方のメッセージ、思いは生徒たちに伝わったのではないでしょうか。

本当の気持ちは…

松本市奈川地区（旧奈川村）は、2005年の市町村合併で松本市となった山間地区です。奈川中学校の生徒は、中学校を卒業すると、家を出て、下宿や寮、または街中に暮らす親戚の家に住むということになります。奈川の家からは高校に通えないからです。先生方は、卒業後家を離れる子どもたちのために、「自立して生活できるように」ということを大切に考えています。　「STOP! 奈川の人口減!!」は、中学2年生の8人の生徒たちが取り組んだ社会科の授業です。

奈川の人口減の問題

やっぱり……

人が少なくなってこのまま奈川の地域をなくしたくないな。

課題に気づく

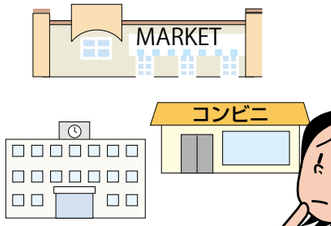
様々な意見を受け止める

地域の人たちの話を聞いて気づいたこと

美しい自然、伝統文化、人とのつながり……奈川の良さを再発見！

お年寄りのふるさと奈川に対する誇り、愛情、僕ら若者への期待……

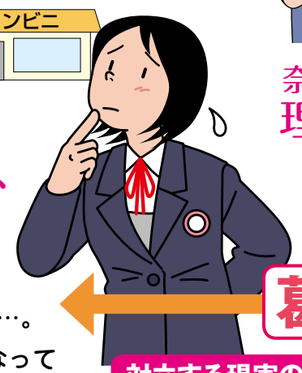
都会の人が羨ましがるような奈川ならではの良いところもあるし、不便でも暮らせないわけじゃないんだな。



だけど今は、

高校生になれば奈川を離れて、そのまままちに住みたい……。

でも、奈川はなくなってほしくないし……。



葛藤…

対立する現実の中でより良い道を探す

奈川の人口減をSTOPさせるために…理想は

若者を増やして、お年寄りを支えていく地域にするべきだ！

答えの出ない難問に、もう一つの視点を！

聞き取り調査で出会った、実際に奈川を愛して暮らし続ける人の言葉は、生徒たちには大きな衝撃だったそうです。自分たちの「不便」は、見方を変えればまったく問題にならないという答えは、物事には様々な見方があり、地域にはいろいろな思いがあるということのあらわれでした。

過疎・高齢化に限らず地域の問題は、簡単に解決できるものではありません。そこには様々な人の思いや、矛盾する現実があります。対立するものの見方や考え方も一つひとつ丁寧に検証し、関係する人の声を聴き、真剣に考えることが必要です。この授業の実践の中で、若林先生は繰り返し「もう一つの考え方」を生徒たちに投げかけていました。確かにここは不便だけど、それは本当だろうか？実際に見てみよう。確かに店はないけれど、それは暮らせない理由になるだろうか？ 実際に話を聞いてみよう。人口減少は深刻な問題だけれど、じゃあ君たちはどうする？

この授業で地域の未来を考えながら、彼らは地域の葛藤に向き合うプロセスを体験しました。答えを出すのは一人ひとり。時間をかけて考える必要のある課題が、彼らに残されています。

いつかその課題と向き合ったときに、考える材料の一つにしてほしい……。（奈川中学校2学年担任 若林史也先生より）

長野市立　松代中学校

電車廃線から地域を考えた

ありがとう屋代線活動実行委員会の活動

やまびこだより No.125（2012年度）より

松代中の生徒たちの通学にも数多く利用された屋代線。

文化祭での発表

「ありがとう屋代線新聞」

ありがとう屋代線活動実行委員会17人のメンバー

●松代中学校教頭　宮下昌史先生より

今でも学校のホームページを見た人が、「ありがとう屋代線新聞」のバックナンバーを求めて学校に来られます。松代駅は代替バスの待合になるので、清掃活動などは受け継がれて続くといいなと期待しています。

屋代線に感謝の思いを伝えたい

2011 月。長野電鉄屋代線の廃線が発表されたことで、松代地区の大人は反対運動を始めていました。それを聞いて鉄道が大好きな青木卓也くんは、存続を目的に松代中学校として何かできないかと先生に相談しました。しかし、学校という公共の場で、一企業を支援する方向での活動は難しいというのが先生方の見解でした。

でも、青木くんの思いを受け止めた先生方は、まずは感謝の気持を表すことが大切、ゆっくりやっていこうと提案。

有志を募り、集まった 17 人の生徒で実行委員会を立ち上げることになりました。

生徒会の予算をもらうことができ、松代駅の清掃活動と、「ありがとう屋代線新聞」の発行活動が始まりました。

新聞の編集や取材、すべて生徒主体で活動を展開、担当の先生は見守るだけ、新聞の内容にも口出しはしませんでした。

地域の未来まで考えた

新聞作り、清掃を通して地域の人たちと出会い、語り、教えてもらうことがたくさんありました。松代というまちに育てられた生徒たちはまちを愛する心をもち、廃線問題だけでなく、地域の未来を考える視野をもつこととなりました。

最後の新聞では廃線の原因をメンバーで考える「屋代線サミット」を開き記事にしています。そこで語られたのは大人顔負けの議論。「過疎化」「地域衰退」といった言葉が出され、その解決策まで提案されています。

中には、「大学で都会に行っても松代に帰ってきて地元で働くって大事」「僕たちはたくさんの地域の人に支えられてきた」という言葉も……。

自分たちより下の年代（小学生）にも屋代線のことを覚えていてほしいとキッズ新聞も発行。ふりがなをつけたり、キャラクターを自分たちでつくるなど工夫をこらしました。まさにユニバーサルデザインです。

僕たちのまちを走る電車が、廃線になってしまう。ふるさとの駅が、時刻表から消えてしまう…鉄道好きの生徒の思いが、まちの歴史と今抱えている課題、地域と自分たちの未来を考える活動につながっていきました。

キーワードは“テツ”（好きなこと）と地域への思い！

●ありがとう屋代線活動実行委員会
委員長　青木卓也くんより

活動を通して多くの地域の人と出会い、あたりまえのことが実はあたりまえではないことに気づきました。これからも自分なりの活動を続けたい。廃線を無駄にしないことが大切。特に LRT（跡地での運行が計画されている新型路面電車）の計画がどうなるのかはとても気になります。

●青木卓也くんのお母さんより

この活動を始めてから、住民自治協議会の人ともたくさん関わってきて、「お茶していけやー」などと声をかけてもらうこともあります。大きくなって松代の役に立つ人に育ってもらえたらいいなと思います。

＊「ありがとう屋代線新聞」は松代中学校のホームページで読むことができます。→ http://www.nagano-ngn.ed.jp/matsujh/

未来をつくる中学生議会
故郷を担う私たちの取り組み

高山村立 高山中学校

やまびこだより No.135（2014年度）より

▲高山中学校の体育館が議場です。

フィールドワーク

高山村はワインぶどう栽培に最も適した地域です。しかし、生産者が少なく、村にはワイナリーがありません。

高山中学校の「中学生議会」は、全校生徒が議員となり、高山村の未来に向けて直接意見や要望ができる場です。1998年からほぼ毎年開かれています。議長は生徒が務め、実際の村議会と同じ形式で村長さんや村議員さんたちが出席し、生徒の発言に答えて下さいます。

議会で提案することは、総合的な学習の時間に“故郷（ふるさと）高山村”をテーマとしたフィールドワークで感じたことを出し合い、学年ごとに話し合って決めます。ワイン用ぶどう農家を訪ねたグループは、村おこしのためにワインを特産とした観光振興策などを提案しました。

これまでにもさくら街道の整備など、「中学生議会」の提案に応えて実現された例は数多くあります。自分たちで高山村のために考え、提案したことが実現するのは、とても嬉しいです。

これからも「中学生議会」をさらに盛り上げ、故郷の未来の担い手として、大好きな高山村のことを考え続けていきたいです。

リヤカー商店開店！
買い物弱者問題を考える～

長野県 飯田長姫高等学校

高校生ボランティア新聞 Vol.6（2012年度より）

リヤカーで食料品や日用品などの移動販売

「ユニバーサルデザイン大学生高校生会議」にも参加

買い物弱者になる可能性が高い人は？

- 車を運転できない高齢者
- 体が不自由な人

「買い物弱者」「買い物難民」という言葉をご存じですか？　ここ数年、スーパーの撤退や商店街の衰退などで、歩いて行けるお店が少なくなり、買い物に不便を感じている人々が増えています。

私たちはそうした「買い物弱者」への支援として、リヤカーによる食料品や日用品などの移動販売を飯田市内で行い、誰もが安心して暮らせる地域とは何かを考えました。

少子高齢化や都市化によって近所づきあいが希薄になり、買い物を頼める人が身近にいないことも問題の要因と考えられます。

「ユニバーサルデザイン大学生高校生会議」でリヤカー行商を実践した松本大学の先輩たちと話し合ったり、タレントの三四六（さんしろう）さんと長野県の将来について語り合うフォーラムにも参加したりしました。

私たちにできること、できないこと

○近所の買い物弱者の方々に声を掛ける。
○代わりに買い物に行く。（届ける）
△近くに店を出店する。継続的な販売。
×公共交通網を改善する。

地域のスーパーなどは、行商や宅配サービスを行うといい。

買い物弱者の問題を他人ごとにしない！

私たち自身が社会の問題に関心を持ち、解決のために積極的に行動していくことが必要。

夏休みのトマト収穫作業
伝統行事を受け継いで

安曇野市立 堀金中学校

やまびこだより No.127（2013年度）より

炎天下の中での収穫作業

文化祭でのリヤカーの贈呈式

堀金中学校では、様々な福祉活動を行っています。その中でも大きな活動は『トマト収穫作業』です。20年以上前から伝統的に行われている行事で、生徒会役員が中心となって計画し、夏休みに全校生徒が集まってトマトの収穫作業をします。

今年は暑い日が続いたので、トマトがかなり傷んでしまっており、ちゃんと採れるのか不安でした。しかも収穫日当日は太陽がこれでもかと照りつける炎天下。とても暑い中の大変な作業でしたが、みんなで汗を流しながら、お互いを励まし合い、一生懸命トマトを収穫しました。みんなの心配をよそに、トマトが入ったケースは増えていき、ピカピカに光る真っ赤なトマトが大量に採れました。

採ったトマトは加工工場に出荷します。その収益金の一部と、毎週行われているアルミ缶回収の収益金を合わせて、物品を購入し、安曇野市社会福祉協議会堀金支所に寄贈しています。今までに車イスや災害時用の発電機等を贈ってきました。今年は支所の希望により、リヤカーを購入し、文化祭で贈呈式を行いました。リヤカーは、農作業などで活躍しているようです。

これからも、伝統行事として後輩に受け継いでいってほしいと思います。

地域の方々とともにアルミ缶回収
換金して購入した車いすを地域の施設に贈呈

佐久市立 野沢中学校

やまびこだより No.131（2013年度）より

野沢中学校では、地域の方々の協力を得てアルミ缶回収を行っています。回収したアルミ缶を換金し、車いすを購入して、近隣の福祉施設や老人ホーム、デイサービスセンター等に寄贈しています。

この活動は10年程前からずっと生徒会活動のひとつとして位置付いています。アルミ缶を処理するのは施設委員会の活動です。清掃時間に処理をします。時には袋の中にアルミ缶以外の物が入っていたり、アルミ缶が十分に洗っていなくて臭ったりすることもありますが、車いす購入のために根気強く作業を行っています。駐車スペースが十分あるので、学校付近の方はもちろん、学区外の方々の協力もいただいています。

正門付近にアルミ缶の回収箱を設置

施設の方々に学校に来ていただき、贈呈するときはとても感慨深いものがあります。また、自分たちが寄贈した車いすが各施設で役立っていることを知ると嬉しくなります。地域の方々の協力を得ながら、人のために役に立つことができ、喜んでいただけるからです。

贈呈式で施設の方々と一緒に

今後は車いすだけではなく、施設の方々に喜んでいただける他の物も寄贈することを考えています。地域の方々の力を地域に還元する役割を果たしていきたいです。

アルミ缶でつながるふれあいの輪
地域の福祉施設との交流

上田市立 長小学校

やまびこだより No.132（2014年度）より

長小学校では、児童会活動で11年前からアルミ缶回収を行っています。代表委員会が全校に呼びかけ、各家庭から回収します。

全校児童115名の小さな学校ですが、昨年度は1年間で約679kgのアルミ缶を集め、49,245円の収益を得ることができました。そのお金で、地域の福祉施設、ライフステージかりがねと真田グループホームに、キーボードとポータブルトイレを贈りました。

7月に6年生14名は、ライフステージかりがねの皆さんとの交流会に参加しました。はじめはどのように声をかけ、ふれあったらいいか分からず、緊張していました。でも、以前に贈った車いすやボールなどのレクリエーション用品を使ったゲームをし、お互いにふれあうことで、楽しみながら自然とコミュニケーションがとれるようになりました。

アルミ缶回収当番

ライフステージかりがねの皆さんとの交流会

交流を終えて、「アルミ缶回収をもっとがんばりたい」「施設の方々のほしいものが贈れるようにアルミ缶集めを呼びかけたい」という思いを持ちました。

今後もふれあいの輪を大事にしながら、全校でアルミ缶回収をがんばっていきます。

3 社会を変える

4 協力して大きな力に